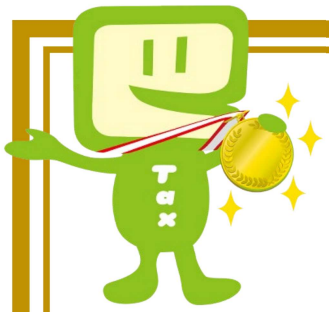


大阪国税局長賞

私の「見える」を支えたもの

洛南高等学校　１年　池田　佳里奈

「やり方がわからないんじゃなくて、見えないの！」これは私が３歳児健診で視力検査を受けたときに、怒った口調でお医者さんに言った言葉だそうだ。これはお母さんから聞いた話である。検査では、手に持った輪っかを、見えているマークと同じ向きにするように言われた。しかし、私はマークが見えないため、輪っかを同じ向きにすることができなかった。お医者さんは私が検査のやり方を理解してないと思い、何度も説明してくれた。それに対して私はあんなことを言った。その後、弱視矯正用のメガネを初めてかけた時、「ママの顔が見える！」と喜んだそうだ。

視力矯正のために毎日メガネをかけていたが、私はメガネが大嫌いだった。冬、外から帰ってきて家に入るとレンズが曇って見えにくい。幼稚園では友達に「メガネ貸してー」と言われた時、「これは矯正用だから貸せない」と言うとモノを貸してくれない悪者にされた。そして、私は記憶にないが、小さい頃はメガネと一緒に「アイパッチ」をつけていた。アイパッチとはメガネの片方のレンズに装着して、よく見える方の目を隠して、視力が悪い方の目を使わせるために使うものだ。それをつけていると、小学生の男の子から差別的な発言を受けたそうだ。そんなこともあり私はメガネが大嫌いだった。

８歳の頃、新しいメガネを買いにメガネ屋さんに行った時お母さんが「もう次からはメガネ代高くなるなー」と言っていたのを思いだした。当時の私は「そうなんだ」としか思わなかったが、今回税の作文を書くにあたって詳しく調べてみた。すると、９歳未満の子どもが弱視などの治療用としてお医者さんの指示を受けて作るメガネには、条件を満たせば健康保険から費用の一部が支給される制度があることを知った。そして、その健康保険の財源は保険料だけでなく、税金も財源の一部として使われていることがわかった。その制度のおかげで私はメガネをかけ、今では裸眼でも生活ができるくらいまでには視力が回復した。この制度を知り、大嫌いだったメガネも少し好きになれた。遠いものだと思っていた税金は思っていたよりも身近なものだった。税金は「払うもの」という考えが、「誰かを支えるためのお金」という考え方に変わった。

日本では医療や社会保障だけでなく、教育や警察、道路の整備などたくさんの場面で税金が使われ、さまざまな面から私たちの生活を支えてくれていることがわかった。私は将来、災害現場で人を救うお医者さんになりたい。これまでの私は社会に支えてもらっている側だった。だからこれからはお医者さんとして人を支える側になりたい。そして働くようになったら税金を納め、直接人を救うだけでなく、間接的に社会を支える一員にもなりたい。小さい頃の私が「ママの顔が見える！」と喜んだように、今度は私が誰かの喜びを作れる人になりたい。